

# 平成30年度第7回つくば市総合教育会議次第

日時：平成30年12月26日（水）

10時から12時まで

場所：庁議室

1 開会

2 市長挨拶

3 内容

教育大綱策定に向けた学校長との意見交換

4 閉会

事務局：総務部総務課

：教育局教育総務課

## 第7回つくば市総合教育会議 出席学校長名簿

(敬称略)

役職	氏名
洞峰学園つくば市立二の宮小学校 校長	石黒 正美
大穂学園つくば市立前野小学校 校長	飯島 孝子
光輝学園つくば市立手代木中学校 校長	土田 十司作
桜並木学園つくば市立並木中学校 校長	岡野 恵子
つくば市立秀峰筑波義務教育学校 校長	松本 義明

## つくば市学校長会

(敬称略)

役職	氏名
会長 (吾妻学園つくば市立吾妻小学校 校長)	遠藤 知昭

## 会 議 録

会議の名称		平成30年度第7回つくば市総合教育会議		
開催日時		平成30年12月26日(水)10時00分から12時00分まで		
開催場所		つくば市役所5階 庁議室		
事務局(担当課)		総務部総務課		
出席者	委員	五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員、倉田教育委員		
	学校長	飯島校長(前野小学校)、石黒校長(二の宮小学校)、土田校長(手代木中学校)、岡野校長(並木中学校)、松本校長(秀峰筑波義務教育学校)、遠藤校長(吾妻小学校、つくば市学校長会長)		
	その他	毛塚副市長		
	事務局	《総務部》吉沼次長 《総務課》中泉課長、奥沢課長補佐、荒澤課長補佐、高野係長、東泉主査、渡邊主任 《教育局》森田局長、大久保次長 《教育総務課》貝塚課長、吉沼課長補佐、笹本課長補佐、宇津野係長、青木係長 《教育指導課》根本課長		
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数	10名
非公開の場合はその理由		-		
議題				
会議	1	開会		
	2	市長挨拶		

様式第1号

次	3	内容	教育大綱策定に向けた学校長との意見交換
第	4	閉会	

<審議内容>

事務局：それでは、定刻となりましたので、ただ今から「平成30年度第7回つくば市総合教育会議」を開催いたします。本日は、お忙しいところ御出席いただきまして、ありがとうございます。開催に当たり、市長の五十嵐より御挨拶申し上げます。

市長：おはようございます。御出席ありがとうございます。本日は、校長先生にいらしていただき、いろいろな意見交換をしたいと思っています。これまでの会議でいろいろな議論をしてきましたが、当然学校現場の先生方とギャップがあって、我々が描くものが理想だけを話したり、きれいごとを話したりしても仕方がありませんので、校長先生方から、率直に今学校でうまくいっていること、いっていないこと等をお話しいただき、我々としてどういうことを教育大綱に書き込んでいく必要があるか、どういう考えで大綱をつくっていく必要があるかを議論していきたいと思います。先生方、御準備をいただいているかと思いますが、本音ベースでどんどんいろいろなことをおっしゃっていただければ、大変ありがたいので、どうぞよろしくお願いします。

事務局：ありがとうございました。本日の会議は、お手元の次第に従い、正午まで予定しています。今回は、教育大綱の策定に向けた学校長との意見交換となっております。限られたお時間ではありますが、どうぞよろしく申し上げます。それでは、次第の「3 内容」に移ります。以降の議事進行は、五十嵐市長にお願いしたいと思います。

市長：この総合教育会議を始める時に、いくつかの問題提起をしました。「今教育現場で何が起きているのだろうか。」というところで、「先生とはどういう

役割なのか」、「先生は、どうしてここまで忙しくなっているのか」等について、伺いたいと思っています。ここでも、先生の役割について「先生というのは、きつこうい仕事であり、こういう人たちだと思う。」ということも当然議論していますが、正解はありませんので、校長先生方もそういう視点から、これまでの豊富な御経験の中で、お話を伺いたいと思います。順番に御意見を伺っていきたくと思いますが、先に、例えば、お1人お話ししていただいて、それに対して質疑をしていく形がいいのか、まず一通り、全員の方にお話ししていただいて、ディスカッションに入ると、どちらがいいですか。

〔「後者」と呼ぶ者あり〕

市長：では、後者ということで、御用意していただいているものがあると思いますので、まずそれをお話しいただいて、質問等があれば、全て各自メモしていただいてまとめて質問していただく形でよろしいですか。

〔「はい」と呼ぶ者あり〕

市長：では、どういう順番がよろしいでしょうか。座席の順で、飯島先生からお願いします。

飯島校長：改めまして、前野小学校の飯島と申します。本日は、このような会議でお話しさせていただく機会をいただき、ありがとうございます。どうぞよろしく願います。

まず、前野小学校の説明をさせていただきます。前野小学校は、つくば市北部に位置しまして、旧の大穂町になります。創立は明治26年、尋常小学校から始まっています。豊里中学校区の今鹿島小学校地区と隣接した小学校です。保護者のほとんどが三世代同居で、両親共働き、親子、祖父母から同じ小学校を母校とする家庭が多いです。そのため、地元根差し、地元を愛して、学校に協力的な保護者がほとんどです。その一方で、新しい住民の方も増えてまいりまして、「学園地区と同じような教育を」ということを学校評価アン

## 様式第1号

ケートに書いてくださる保護者も多く見られました。日々、それらの対応をしているところです。児童数ですが、各学年平均して30名弱の単学級で7学級（1特別支援学級を含む）、全校で151名です。児童を常勤で担当するのは、6人の担任と特別支援の先生のちょうど7名の担任だけです。よって、1人が出張となりますと、そこには教務主任が填補に入り、もう1人が出張又はお休みになると教頭が、場合によっては、校長も授業を担当していることがあります。担任の状況ですけれども、担任は毎日明日の授業の準備を行って、大体小学校ですので、7時から8時ぐらいに退勤することが多いです。中学校よりは早く帰っているとは思いますが、小規模校なので、1人の教諭が受け持つ校務分掌はかなり多く、それだけで出張も多くなるということになります。校内研修も計画的に実施しています。日々の子どもの出来事への共通理解や支援についての話し合い、特別支援や各種のいろいろな行事についての話し合いを校内で組織を組んで行っているのですが、元々が11人の教師集団ですので、すべてのことに全員がどの組織にも入っているというようなものが、この規模の小学校の実態かと思えます。本年度小中一貫教育の研究発表会、2年次でさせていただきました。テーマが、教育長の掲げる「社会力」です。この社会力を豊かに身につけた児童生徒の育成ということで、地域の特性を生かして、地域の方々との授業を多く取り入れ、今回新学習指導要領で目指している「社会に開かれた教育課程」というものを意識して取り組んでいるところです。本校は、保護者や地域の協力、そして教職員の協働によって、おかげさまで、今のところ不登校、重大ないじめ案件、大きな事故等は起きていません。子どもは、子どもらしい伸び伸びした素直な育ちを見せてくれています。こういう良さを大切にしながら、「新しい時代を生きていく子どもたちを育成する」という保護者の要請もありますので、そちらのために、今後とも気を引き締めて当たっていきたいと考えているところです。どうぞよろしく申し上げます。以上です。

## 様式第1号

市長：課題とかをちょっと先に、先生が感じられていることとかがあれば、伺っておいていいですか。

飯島校長：課題というのは、途中で少しお話しさせていただいたのですが、やはり教職員の数にもう少しゆとりがほしいというところが、この規模の小学校全体における課題ではないかと思っております。

市長：ありがとうございます。では、石黒先生、お願いします。

石黒校長：二の宮小学校校長の石黒と申します。本日はよろしくお願ひいたします。二の宮小学校は、御存じのとおり、洞峰公園に一番近い学校ということで、自然環境に恵まれ、研究所にも近く、非常にいい環境にある学校だと思っています。保護者は、やはり近隣のマンションやURの賃貸住宅にお住まいの方が多いので、本校の一つの大きな課題としまして、やはり地域との連携協働にちょっと弱い点があるというところが課題として意識しておりました。新学習指導要領の重点で「社会に開かれた教育課程を実現する」という大きな目標がありますので、特に本校、今年度は、家庭、地域との連携協働を進めるというような課題を持って、教育活動に取り組んでいるところです。そういう課題に対して、今年度どのような方策をしてきたかと申しますと、新たにスクールボランティア制度というのを立ち上げまして、全家庭に「こういう活動をするので、協力できる人はお願いします」という文書を配布して、お願いをしました。全校児童 640 名ほどの中で、協力してくださる保護者の方が 60 名近くいらっしゃって、人材バンクを作成しまして、教育活動に活用しているという状況です。保護者の方は、やはり得意分野をお持ちの方が多いので、保健面、体育面、あるいは家庭科といった授業のゲストティーチャーやアシスタントに来てくださる方が多くなりました。また、それ以外でも、環境整備や子どもたちの体験活動、まち探検等にも一緒に行ってくださいという方が増えています。もう一つ実施したのが、休み時間の見守り活動です。大規模校に属しますので、休み時間にぶつかる等により、けがをす

ることも結構ありました。もちろん先生方も休み時間に一緒に子どもと活動するのですけれども、非常に先生方の時間がない。今年度、中学校から初めて小学校に来た先生は、トイレに行く時間もなく、膀胱炎になってしまったという事例もありまして、保護者をお願いしたところ、休み時間の見守り活動も協力しましょうということで、結構来てくれる方が増えました。お願いと申しますか、今後の課題としましては、やはり、学校が今一番ほしいのは人であるということで、学校と地域をつなぐ地域コーディネーターが必要かと思っています。今年度、本校では、その地域コーディネーターを教務主任の先生をお願いしているところなのですが、教務主任が非常に忙しく、非常に大変な状況ではあるのが事実です。そこで、提案と申しますか、お願いとしまして、この学校地域コーディネーターのような役割をしてくださる方がいるとありがたいです。例えば、交流センターにそういう方がいらっしゃるとか、学区内の小学校に来て、いろいろ相談も乗ってくださるような方がいるとありがたいというところが一つあります。あと、本校で頑張っているところが、市の目標であります「社会力」を育成するために、ESDを進めています。ESDというのは、持続可能な社会を創造していく教育ということで、こちらは、今、市長が進めるSDGs（持続可能なまちづくり）にも通用するかということで、このESDを校内研修として、取り組んでいるところで、以上です。

市長：ありがとうございます。地域コーディネーターのイメージをもう少し具体的にうかがえますか。例えば、公務員、地域の人、市役所職員、研究者OB、主婦等どんな人かということと、どんなことを具体的にやってほしいかをもう少し先に聞いていいですか。

石黒校長：いろいろな方が考えられると思いますが、私がちょっと聞いたある市では、退職された元教員を社会福祉協議会で地域コーディネーターとして任命して、各学校に配置して、子どもたちの登下校の見守りや美化活動、自

## 様式第1号

習の見守りなどもやってくれるということも聞いたことがありますけれども、そのような人がいれば、ありがたいというところです。

市長：そうすると、給料を払って委託をしてというような形でというイメージですね。

石黒校長：そうですね。

市長：先ほどのそのスクールサポーターという話がありましたけれども、スクールボランティア制度をもっとフルでしっかりやっていただくような人というようなイメージでよろしいですか。

石黒校長：はい、そんな感じです。

市長：分かりました。ありがとうございます。では、岡野先生お願いします。

岡野校長：並木中学校の岡野です。よろしくお願ひいたします。本学園の子どもたちは、非常に素直で穏やかで、学力も高く、運動面でも実績を發揮するなど、本当にどこへ出しても恥ずかしくない子どもたちと私たちは常々言っております。私たちは、子どもたちに、明るく未来に向かっていける力を身につけさせたいと考えているのですが、その中で、本学園の課題となるのは、たくましさとか、しなやかさとか、人間関係を上手に築いていく力ではないかと捉えています。そのために、キャリア教育を充実させる試みの中で、多くの人と関わりながら、自己実現を図ることができればということで、それを中心に取り組んでまいりました。私は、教員というのは、子どもに向かっていくもの、ちょっと言葉が抽象的なのですが、全力で子どもに対応するのが本分と考えています。もちろん社会生活ですから、社会に対応したり、保護者に対応したり、行政的なものに対応したりということもあるのですが、それはそれぞれその道のプロがしてくれると一番ありがたい。目の前の子どもを今どうするかということを真剣に考えられる、それが教員として、一番大切なことなのかなと思います。そうすれば、その教員が温かくて、はつらつとしていて、思いやり深く子どもたちに接することができて、子ども

私たちは学校に来るのにどれほど喜んで来るだろう、どれほど楽しいだろうと考えています。そのため、教育ですから、ただ喜んでいるだけでは十分でないところもありますので、子どもたちを教え導くためには、教員の資質・能力の向上、それが欠かせないわけですが、中学校ですと、なかなかそれが思うに任せない現状があります。原因は大きく三つあると考えています。一つは、部活動です。今年、県からの指導を受けて、部活動に関してつくば市に明確な運営の策定の指針を出していただきました。それから、近隣大会を廃止するなど、先生方の働き方、それから子どもの健康面に配慮した取組をしてくださって、非常に感謝しているところです。この上は、先生方が安心して子どもたちの力を伸ばせるように、例えば、選手派遣費をもうちょっといただきたいとか、それから、各種大会において、専門の資格を持った看護師が、その会場にいてくれる等をお願いできればと考えております。先生方の多忙の第2番目の理由なのですが、これは、子どもに関わる要素ですので、明確にここまでが私たち、ここから先が専門家というわけにはいかないのですけれども、例えば、保護者対応として言いがかりとしか思えないようなことを学校に言ってくる保護者もまれにおります。そのことに関しては、教育局からの御指導があつて、市の法務監を活用しての相談ということの道筋が引かれ、大変ありがたいことと感謝しております。この上は、それを一歩進めていただいて、スクールロイヤーの設置に御尽力いただければありがたいと思います。それから、不登校生徒への対応というのも、これは保護者とちょっと一線を画すのですが、なかなか教員にとって、重いものがあります。いろいろな心の闇を抱えた子どもたちに、なかなか専門的な知識を持って対応するということが難しいので、そういう相談の窓口などがあると非常にうれしいことですし、この間びっくりしましたのは、私6時半ごろ退勤しようと思って駐車場におりましたら、何台も車が入ってきて、その車の1台、1台に、昼間学校に来られない子たちが乗っているわけなのです。その子たち

は、今から職員室に行って、担任の先生なりと会って、少し話をしたり、ある程度学習をしたりして、また帰るわけですけれども、そういう生徒がかなりの数いるということは、その時間、先生方は、子どもに向かうのですから、それはもちろんしなければならないことなのですけれども、そのときに、別の角度からサポートしてくださる方がいると、非常にいいのではないかなと考えております。それが二つ目です。それから、三つ目は、これは外的要因としてなのですが、文書処理や調査物が年々増えております。いろいろなことに社会が敏感になっているので仕方がないところもあるのですが、それを何とか授業を行いながら、教員たちがこなしているという現状もございます。事務的な負担の軽減のためには、ぜひとも全校への校務支援システムの導入をお願いしたいところです。お願いばかりで申しわけないところもあるのですが、今お話ししたような三つの点について、ぜひ御検討いただければありがたいというふうに考えております。以上です。

市長：ありがとうございます。それでは、土田先生お願いします。

土田校長：手代木中学校校長の土田と申します。本日は、現場の声を聞いていただく貴重な機会を設けていただきまして、誠にありがとうございます。本題に入る前に、今までの経験から、「教師の役割って何だろう。」と考えることがあるのですけれども、大きく二点あると私自身は捉えています。一点目としましては、やはり学校ですので、集団生活の中で、協力したり助け合ったりすることで、共同していろいろなことを成し遂げる豊かな体験ができます。そのことを通して、情意面のさまざまな発達ができるのではないかなと考えております。いわば集団での生活を学んでもらっているということになるかと思います。もう1点としましては、さまざまな学習の機会を通して、自らを高めようとする意欲的な態度を養うこと、こちらで学習の仕方を学んでもらうということで、集団での生活の仕方を学ぶ、学習の仕方を学ぶという、そういった役割に手助けできるのが教師かと考えております。現在、本

校は生徒数が 500 名。教職員 32 名で、その指導に当たっているという現状です。そういった中で、今預かっている子どもたちが、将来社会に出て、必要な力を十分に身につけさせて、卒業させていくことが大事かなと捉えています。非常に変化の激しい、先の見えない時代の中で、子どもたちが自ら問題を見つけて、友達と協力し、協働しながら、新しい課題解決に当たっていけるような力が必要かなと思います。具体的に、これからの本校の課題にも入ってまいりますけれども、そういった中で、学習の場面ではどうかと考えてみたときに、やはり子どもたちが、ただ学んだだけではなくて、学んだ内容を人と意見を交換したり、それを練り上げたりしながら、知識がつながったり、比較したり、構造化したりすることで、より深い学びをさせることが、授業の中で一番大事だと思っています。そういった深い学びを創造するために、ぜひお願いしたいと思っておりますのは、例えば、数学ですと、図形の変形やグラフの見方をしたり、あるいは社会ですと、資料提示とか、資料の比較をしたり、理科では、シミュレーション、国語ではデジタル教科書で原文を引用したりといったことを考えますと、やはりできれば、各学級に電子黒板が 1 台は必要と思っております。やはり電子黒板の良さは、目の前で操作しながら、お互いの思考を比較できる、視覚的な面で非常に重要だと思っております。今年度、学校の中で、コンピューター室のコンピューターが一新されてプログラムもできるようになりまして、保護者からも大変感謝されておりますし、ぜひタブレット等の導入もお願いしたいという保護者からの要望もございます。子どもたちが、自ら様々な面で学び続けて、自らを表現するという意味では、やはり電子黒板は是非欲しいということが私ども要望としてお願いできればと思っております。2 点目になりますけれども、中学校では、やはり部活動の充実が欠かせませんが、教職員の負担が非常に大きいのも事実です。特に、市の方針によりまして、土日のどちらかは休むということが、明確に示されまして、学校ではそのようにしておりますが、実は、ちょ

っと学校と離れた部分で、オリンピックや茨城国体を控えまして、各競技団体で強化の仕組みがありまして、さまざまな種目で、実質中体連という組織に依頼をして、指導の依頼がまいておりますので、土曜日は学校の部活をやって、日曜日は休みなものだけれども、その日曜日に、強化団体に呼び出されるということで、本校の職員数名は、3か月ほど土日もないような状況で勤務しているというような現状もございます。これは学校だけでは解決できないので、こういった点も、今後、職員の健康面からも、改善していかなくてはいけないと思っております。また、実際に本校で、さまざまな大会に出るバス代等、今日はちょっと調べてまいりましたが、本校は月1人700円ほど教育振興会費ということで、保護者の皆様に御負担をいただいております。そうしますと、年間370万ほど、教育振興会費として、さまざまな御協力をいただいております。そのうち、約300万円が部活動の大会、公式戦ですけれども、バス代に支出されているという現状がございます。この辺についても、御検討いただければありがたいと思っております。最後に、本校の現状でございますが、特に中学校におきましては、若手教員が非常に増加しております。本校でも、担任の平均年齢は20代ということで、経験年数が非常に若い教員が多くなっております。そういった意味では、若手教員の実践的な指導力を高めるために、是非本市にあります総合教育研究所などの御協力をいただきながら、実践的な指導力の向上に努めてまいりたいと思っております。以上、要望になってしまいましたけれども、本校の現状と課題についてお話しをさせていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

市長：ありがとうございました。どうぞ、松本先生、お願いします。

松本校長：秀峰筑波義務教育学校の松本です。本日は、このような機会に参加させていただきまして、誠にありがとうございます。学校の様子をお話しする前に、まず、本校開校に当たりまして、五十嵐市長様初め、門脇教育長様、

## 様式第1号

教育委員の皆様、そして、教育局の皆様方には、大変お世話になり、誠にありがとうございました。また、開校後においても、いろいろな面で御配慮、本当にありがたく思っております。おかげさまで、現在まで、交通事故等もなく、安全・安心な学校づくりができております。本当にありがとうございました。さて、本校の学校経営についてですが、「教育は人なり」という言葉があるように、教師が子どもたちに与える影響には、大きなものがあると考えます。常に、向上心を持ち、学び続ける教師集団づくりを目指しています。そのため、学校経営に当たりましては、本校の教育目標達成に向けて、児童生徒にとって授業がよく分かり、学ぶ楽しさが味わえる学校、教師にとってやりがいのある学校、そして、保護者や地域から信頼される学校を目指しております。当面する本校の課題といたしましては、やはり本校は、旧筑波町の2中7小が統合されてきた義務教育学校であり、本校に対する保護者や地域の期待がとて大きいものがあります。そのため、保護者や地域から信頼される学校づくりが、今年が一番の課題と捉えて取り組んでおります。そこで、今年度は、義務教育学校としての良さを生かした地域と共にある学校づくりを目指して取り組んでいるところでございます。義務教育学校の良さをいかすということは、1年生から9年生までの成長を全職員で見取っていくということであり、数多くの教職員で児童生徒の成長に関わっていける良さがあるかと思えます。また、同じ校舎で日々学ぶことができるので、異学年の交流の機会が数多くありまして、下級生にとっては、上級生へのあこがれ、上級生にとっては、自己有用感の育成につながり、よりよい成長の機会になっていると思えます。地域と共にある学校づくりといたしましては、授業や学校行事等において、地域や地域人材の活用、地域行事への参加等を積極的に行っております。統合前には、地域の人から、「学校が統合されて、地域の行事へ子どもたちの参加はどうなるのですか。」というような声も聞かれました。そこで本年度は、地区児童生徒会を立ち上げまして、地域ごとに各地区の行

事に積極的に参加できるようにしております。また、PTA活動におきましても、各地区の代表ということで、副会長を各地区から選出しまして、副会長7名体制で臨んでおります。さらに、学校評議委員に関しましても、各地区から1名ずつ選出して、計7名の学校評議委員がおりまして、各地区の意見が学校経営に反映できるように配慮しています。さらには、保・幼・小の連携の充実や筑波高校のつくばね学への積極的な参加により、中・高の連携等も密に実施しているところでございます。現在は、つくばスタイル科の授業において、児童生徒が地域の良さを知り、より地域を好きになってもらおうという趣旨で、PTAの発案で始まった秀峰筑波かるた、俗称「いがっぺかるた」づくりに取り組んでおります。7年生では、以前に行っていました筑波山検定を復活させまして、筑波山のよさを広める活動を行っているところです。児童生徒の観点からの課題といたしましては、学力の向上と自己有用感の育成という2点が挙げられます。学力向上では、先ほど述べたように、できた喜び、分かった喜びなど、学ぶ楽しさが味わえるような授業を展開して、確かな学力の育成につなげているところです。具体的には、主体的・対話的で深い学びを取り入れた授業、ユニバーサルデザインを意識した授業、ICT機器の効果的な利活用、そして、5・6年生における教科担任制の導入等を行っているところです。自己有用感の育成に関しましては、互いに良さを認め合える学年、学級経営の充実、そして、異年齢クラスター制（縦割り班活動）を取り入れた特別活動の充実を柱に、自己有用感の育成に努めているところです。そのほか、課題としましては、不登校対策、そして特別支援教育の充実等々、挙げられますが、やはり先ほどから各校長先生が述べられたように、人材確保という面で、人の配置をお願いしたいということが挙げられるかと思います。今年度は、統合加配が1名（2名配当されているが実際には1名しかいない。）と、学校管理員1名、そして、教育局の計らいで、バスの登校時における誘導等の職員を1名配置していただきまして、何とか20台

## 様式第1号

のバスを3名でうまく誘導して、順調にここまで事故もなく来られたところなので。しかし、来年度から統合加配がなくなりますので、そういった面で、やはり人的な配慮が必要かなと考えているところです。その他、市のIT教員の配置事業についても、昨年度の学校で経験したのですが、非常に小規模校にとってはありがたいもので、やはり人材の確保という点で、対策をお願いできればと思います。以上です。よろしくお願いいたします。

市長：ありがとうございます。ぜひ、遠藤先生も、どういうお立場からでも結構ですので、ちょっと自由にしゃべってください。

遠藤校長：吾妻小学校の遠藤でございます。よろしくお願いいたします。まず五十嵐市長様、門脇教育長様に、以前要望書を提出させていただきました。ありがとうございます。内容としましては、スクールロイヤー制度ということ、そして、二つ目は、学校給食費の公会計化ということで、そして、三つ目が土曜授業の見直しと、これは全て働き方改革ということで、教員の働き方改革という視点で、これをお願いしたところです。それに対しまして、スクールロイヤーについては、法務監の活用ということで御提案いただきまして、非常に心強い限りです。二つ目の公会計化については、これは今、検討しているということで、すぐにはいかないのは分かっていますので、検討していただいているということで、お願いしたいなと思っています。給食費の銀行振替でやっているわけなのですが、振替できなかったお子さんが、学校に現金で持ってくるのです。次から次へと持ってくる。私は、一つ一つに領収の校印を押すわけです。どうにかならないものかなというように話しているところです。あと、土曜授業は月曜日の振りかえがないので、非常にはっきり申しまして、教員の負担感、これがかなり強いです。お願いしたところ、来年度は見直しをしていただけるということで、本当にありがとうございます。私は、違う視点でちょっと話をさせていただきます。吾妻小学校は今年で創立40年ということになります。16学級が普通学級で、特別

支援が5学級、そして525人の児童です。いわゆる中規模校になってくるか  
と思います。そこに現在55名の外国人がおります。そして、その外国人のた  
めの日本語指導の加配として、実は今4名の加配をもらっています。4名の  
加配というのは、日本でもないのではないかなと思います。昨年3名の加配  
だったのですが、この3名の加配も聞いたことがないというように言われて  
いました。そうしますと、それ以降、外国人に対して、加配に加えて風の会と  
いうボランティア団体の協力を得て、日本語指導を行っております。ただ、  
どうしてもやはり日々の生活の中やいろいろな行事、特に一番大きなハード  
ルが入学式、入学説明会、就学时健康診断等に細かい対応をしなくてはなら  
ないわけなのです。その時にやはりどうしても、外国人への言葉の壁がなか  
なか高いです。市のAETの方の協力を得ましてやっているわけなのですが、  
なかなかこのAETの皆さんも、実際には、ほかの学校への勤務があるわけで、  
本校に5人も6人も来ていただくというのは、なかなか難しいところです。  
来年の1年生は、20名の外国人が入ってくる予定ですので、ますますこの外  
国人への対応、学校生活の仕方、あと生活そのものことなのですが、宗教  
上の問題も大きな問題、本校も抱えておまして、やっぱり宗教上の問題に  
も対応していかなければならないということで、そういうような面で、市の  
ほうにも御協力いただければなと思っていますところ。以上です。

市長：ありがとうございました。今、6名の先生方からいろいろお話、現状や課  
題、御要望等いただきましたので、もう率直に意見交換に入っていきたいと  
思います。どなたからでも結構ですので、こういうところをもう少し聞いて  
みたいなどお話しできればと思います。一旦考えていただいている間に、そ  
の校長会からいただいた要望で、三つのうち二つは、来年からできると思  
いますけれども、給食費の公会計化はどうですか。給食費について、何かいろ  
いろシステムを使えばできそうな気もしますけれども。課題など検討状況は  
どうですか。

## 様式第1号

教育局長：教育局では、まずどんな仕事が必要なのかというのを、今、校長会から聞いていて、その中身について、こちらでできるかどうかということなのですが、いろいろなシステムを使っても、やはり今の人員では、ちょっと健康教育課では厳しいです。まずこちら人もやはり増やすことを考えながら、それと同時にシステムをどう構築していくかということと同時に考えないと、正直、解決しないなというところで、今進んでいるところです。

市長：口座残高がなくて、引っかかってしまうということですね。翌月引き落としというわけにはいかないのですかね。それでも足りなかつたりするのか。今一番の問題は、払う意思はあるケースですか。払う意思がない保護者の取り立てが大変とかというところもあるのですか。どの辺の要素が問題なのでしょう。ちょっと口座に忘れてしまって、後からばらばら持ってこられるというのだったら、何か別の支払方法を用意することもできるかもしれないですけども、もし先生方がその給食費を払ってくださいとかというのを、個別にやられていたりするのだったら、それはまたちょっと本当に、何とかしないと。両方、やっているのですか。

岡野校長：今、市長がおっしゃってくださったこと、まさに教職員はやっていて、給食費と学校諸会経費のその納入が滞っているので、お願いしますということを事務員や教頭や担任が行ったりするのですが、お金を請求されると、誰も人はおもしろくないみたいで、払うべきであるにもかかわらず、余りよろしくない関係が生じてしまう。それを避けたいので、事務職や教頭が出ていったりするのですが、悪質なことというのは、本校の場合には、そんなにないですけども、それでも、やっぱり「払わないで済ませられるものなら。」という考えの方もいます。現金で持ってくる、請求に伴って人間関係が悪くなる、またその業務が増えるという三重苦ですよね。銀行で、もう一度どうして引き落としをしてくれないのかという話も詰めたのですが、銀行は1回の引き落としに、今度は引き落としの経費を請求するようになりました。今

様式第1号

まではそうではなかったのですが、その負担はどこへ行くかという、学校では、口座引き落としのための経費はないので、それは一人一人の御家庭での負担になるわけなのです。だから、それを引き落とせなかった時には、もう一度引き落としますよということについての契約が必要だそうで、大概どの銀行でも、1回引き落とせなかったら、あとは現金でというのが、銀行として言われていることです。

市長：ありがとうございます。そうすると、我々もちょっと協力してくださいということ、銀行と話してみる価値はありそうですね。あとは、そのお金をどこがどう負担していくかということですね。落ちなくても、お金を取られているわけではないのですよね。例えば、残高が足りなくて落ちなくても、手数料だけ取られているなんていうことは。

岡野校長：それはないと思います。

市長：ですよね。だから、手数料としては1回。場合によっては、僕から銀行に話したりすることもあると思いますので、新年やいろいろ会う機会が年末年始はあると思いますので、そういうことで解決する部分であれば、我々はやったらいと思うのですが、何ができて何ができないかを、少し仕分けした方がいいですね。

岡野校長：もう一つは、一人一人の給食費の額というのが同じではなくて、例えば、アレルギーを持っていて、牛乳を止めているとか、今度はアレルギー対策で、主食についても御配慮いただけるということになったので、一括していくらというその引き落としが、この子にはいくらと毎月出すのですけれども、何月何日にいくら引き落としますので、入金してくださいというのを保護者に出すのですが、それが1枚の原稿で済まないわけです。そういう配慮を受けている子が30人いれば、30通余計に作らなければならない。これがシステムとして、もうこの子はいくら引き落とすということが確定していれば、事務員、教頭の業務も大分軽くなるという気はいたします。

様式第1号

市長：毎月お金が変わるということは、結構あることだとは思っているので、やり方は会計事務所等と相談してもよいかもしれません。会計事務所等に相談していますか。

教育局長：いいえ。

市長：今、本当にいろいろなものがあるので、何かテクノロジーで解決できる部分は、テクノロジーで解決するとよいと思います。そんなハイテクではなくて、今の仕組みで済む話だと思います。その辺を仕分けして、できるだけ校長会からいただいた要望について、できれば三つとも何とかやるように我々も努力をすべきで、校長会からの要望というのも、おそらく珍しいことだと思いますし、どこまで応えられるかということが、我々との信頼関係の一步だと思っています。こういう人と相談したらよいかもしれないというのがいくつか頭の中にあるので、後でまた相談しましょう。

どうぞ御自由に、何を聞いても、誰も怒らないということです。どんな失礼な質問をしても、お互い、言いたいことは言って、聞きたいことは聞くという大人の関係であればと思いますので、遠慮せずにごうですか。どうぞ。

鈴木委員：鈴木です。春日学園に中学1年生の子どもがいます。上の子は、春日を出ていますが、中学3年生です。お世話になっています。文科省の「主体的で深い学び」という言葉が先生のお話の中からも大分聞かれましたが、主体的で深い学びというのは、具体的に何を指しているのか。そのために、例えば、今それが不完全であるならば、何が必要なのか。それが達成できるのには、何が必要だとお考えなのかお聞きしたいです。

市長：どうしますか、全員に聞くか、答えたい方に答えていただきますか。

鈴木委員：答えたい方で結構です。

市長：では、ぜひ、おそらく何度もこの主体的で深い学びというのは、上からも落ちてくるのでしょうか。どうぞ。

鈴木委員：私は、主体的で深い学びが現在できているかといえば、残念ながら

できていないと思います。それには、何が不足しているのか、何があればそれがより深まるのかということをおなりに考えてみますと、一つは、先ほどから先生方も言うておりますように、先生たちに余裕があること、現場にももう少し人が配置されること、それと、これは私が常々考えていることなのですけれども、文科省からおりてきているカリキュラムというのがあると思ひますが、この道徳もやりなさい、何々をやりなさい、総合学習でこんなこともやりなさいというのが、どんどん降ってくるようにいっぱいあるかと思うのですが、思い切って、あれもこれもというところに手を出さずに、もう少しできるだけ削って、一つのことに時間をかけてやればいいのではないかというふうに、常々思っています。先日、うちの中学1年生の息子がこんなことを家に帰ってきて言いました。「お母さん、つくばスタイル科って本当に必要なのかな」と。「最近何をやっているの」と聞きましたら、「つくば市に何かこんなことをやったらいいのではないかという政策提案みたいなもので、何かこういう問題があるので、こういうことに取り組んだらいいのではないかということを発表するのだけれども、まず5時間しか時間がなくて、つくば市のこと、そんなに深く分からないのに、何をしたいのか分からない、結局ネットで調べたことを継ぎはぎしてやるしかないのだよ。」とに話していました。「全くそのとおりだね。」と答えたのですけれども、現場の先生に聞いてみると、「もうカリキュラムが決まっているので、5時間でもしようがないので、やるしかないのです。」と嘆いている先生もおります。つくばスタイル科は、総合学習という名のもとにあると思うのですけれども、ぜひそこら辺のカリキュラムの見直しみたいなものをつくばでできないかと私は思っています。決して、土田先生がおっしゃっているように、電子黒板で深い学びができるということの前に、もっとやるのが、私はあるのではないかなというふうに考えています。

市長：ありがとうございました。では指名がありましたので、土田先生、異論、

## 様式第1号

反論何でもしていただいて、あるいは今の問題提起のカリキュラムをどれぐらい現場でどうなのかというあたり、もっと柔軟にやりたいのだけれども等、その辺も含めてお願いします。

土田校長：それでは、私なりの考えですけれども、お話しさせてもらえればと思います。まず主体的、対話的で深い学びと申しますのは、やはりこれからの、先ほど申しました正解のない時代を生きていくために必要なもので、やはり深い学びというのは、その子が本当に、自分がいろいろなことを考えたことだけではなくて、それを友人や先輩や教師やいろいろな方とさまざまな意見を交換する中で、深まっていくものだろうと。つまり、人とつながったり、話し合ったり、コミュニケーションをとったりする中で、育つ学びではないかなと思っております。そのためには、先ほど鈴木委員さんがお話しになりましたように、やはり教師にも十分なゆとりが必要ですし、あとは、学校の中心は授業ですから、その授業の中で、深い学びを目指すのが私ども教師の基本だと思っています。ですから、その授業を充実させるためには、先ほど申しました、つながったり、意見交換したりする重要なツールとして、今子どもたち自然に使っていますけれども、電子黒板等でお互いの考えを伝え合う機会を設けるのが大事ではないかなと、それが学校教育の中で一番大きな効果を上げるのではないかなと私は考えております。

市長：そのカリキュラムの部分なんかはどうですか。例えば、つくばスタイル科の5時間しかないって話がありましたけれども、できないみたいな。その辺、先生方から見て、本当だったら、もっと一つのことをじっくりやりたいけれども、やっぱりたくさんのものが来るので、どうしてもなぞるような感じになってしまっているような実感とかというのは。

土田校長：つくばスタイル科も年間の時間数が決まっておりますから、やはり学校で、特に子どもたちに重点に学ばせたいというところがあります。私もでしたら、防災に今力を入れておりますので、防災の單元については、か

## 様式第1号

なり時間を費やしてやっておりますけれども、その他については、やはりカリキュラム上決まっておりますので、多少時間をこなすということがありますから、やはりそこは児童生徒の実態や学校の実態に応じて、その重点をかけてやるというところが、我々現場を預かる方としては、必要ではないかなと思っておりますので、ちょっと他の学校のことは分からないのですけれども、もしかしたら時間が足りない部分なのかなという感じはします。

市長：つくばスタイル科のカリキュラムについては、誰がどういう決定権を持っているのですか。

教育指導課長：つくばスタイル科については、学校教育指導方針に、時間数をベースとして渡しています。これはあくまでもベースであって、実際の時間数をどう使うかは、学校の実態に合わせて変更可であるということは、お伝えしています。つくばスタイル科の目指すものは、カリキュラムの中身も大切ですが、やはりある程度時間をかけて、課題を見つけて、調べて、発信するというような発信型プロジェクトということになっていきますので、5時間でカリキュラムを組んでいるということは、ちょっとこちらとしては不思議な感じがあります。それは、おそらくその授業を他のプログラムを密にやったがために減ってしまったのではないかとはいっているのですが、こちらの認識では、大きな狙いを外さなければ、各学校の実態に合わせてやっていいという認識でいるので、そこを無理に、このカリキュラムがあるから絶対にやらなければいけないという認識であるとするならば、そこはこちらからお話をしたいと思っています。極端な話ですと、その単元を無理にやらなくても済むものであれば、それでも構わないと思っていますので、大もとのところのつくばスタイル科の意義のところを、もう一回きちんと伝えていく必要があるのかと思いました。

市長：今のようなことは、すごく大事なことだと思います。結構教育局は、もう少しやっていいよと思っても、学校って、大まかな方針が示されると、

先生方もまじめなので、それをできる限り守ろうとするとところがあるのではないかなと思うので、もう自由なら自由で、ポンと明確なメッセージを発していく、そういうことを言い続けるということで、その教育局と学校現場の認識のギャップというのは、少しずつ縮まっていくのかと思います。

教育指導課長：指導方針には、そのことをきちん言葉でも示してあるのですが、やはり全体に伝わるという部分が不足しているのかなという感じはしました。

市長：こういうのはしっかりと伝え続けないと、なかなか浸透するまでは、時間差があるので、書いてはもらっているとは思うのですけれども。今の件に関連して、どうぞ。

石黒校長：つくばスタイル科というお話が出たので、つくばスタイル科、参考書が2冊出ていますよね。それをよく見ると、非常によくできているカリキュラムだと思います。コアカリキュラムとサテライトカリキュラム、それぞれ用意されていて、必ずその学年でつくば市としてやるべきことがコアカリキュラム、サテライトは例示されていて、それをやってもいいし、コアカリキュラムをもっと膨らませて、サテライトの分をやってもいいというようなもので、非常に地域の教育資源や人材をいかせるカリキュラムになっているので、そういう参考書等を読みながら、各学校で使った教材とかも蓄積されているので、そういうのを共有しながらやると、非常に効果的なカリキュラムで、他市町村にないような、いいものだと思います。また、先ほどお話が出た主体的で深い学びについて、これは究極の目標で、どこまでやればいいというものではないのですけれども、やはり子どもは、できるようになりたい、学びたい、そういう意欲の塊だと思います。それに応えるのが教師であって、どうやれば子どもが主体的に学べるようになるのか、そういうところを工夫していくこと、子どもの意欲を高めていくことということが非常に大事、それが私たちの使命かと思っています。深い学びというのは、やは

りその勉強がどう最終的には日常生活に結びつく、ただ勉強だけに終わらず、それがどう役立っていくのか、そういうところまで、感じさせていくのが、深い学びにつながるかと思っているので、そういうところを先生方は毎日教材研究で遅くまで頑張っているというところをお伝えしたいと思います。以上です。

市長：どうぞ。

鈴木委員：ありがとうございます。つくばスタイル科の事例集はよく読みました。大変失礼なことを言わせていただければ、つくばスタイル科の教科書のようなものを、できれば取っ払ってやるくらいのことが、私は必要なのではないかと思っています。皆さん、先生方なので御存じだと思いますけれども、灘中学校・高校の先生に橋本先生という国語の先生がいらっしゃって、お亡くなりになりましたけれども、一つの本を何年もかけて読んで、そこからたくさん脱線していろいろなことを学んでいくという授業の仕方をしていて、子どもたちに力をつけるという先生が、有名な先生がいらっしゃいましたけれども、あれは私立なので、できる技なのかもしれませんけれども、本当の総合学習の意味というのは、文科省が最初出したように、子どもたちから湧き出てきたことを学習に結びつけていくようなことだと思うのですけれども、例えば、イエナプランであるように、子どもたちが何か始めたときに、それが何の教科に当たるのか、何の学びに当たるのかというふうに当てはめればいいだけで、とにかくつくばスタイル科に、何か型を持たないというのも、もしかしたら、私はそれがいいやり方なのではないかなというふうに、まずは思います。電子黒板ですけれども、土田先生がおっしゃいましたが、確かに便利なツールだとは思いますが、私はやはり、特に低学年、小学校のうち、子どもたちは、とにかくフェイス・ツー・フェイスで、がちゃがちゃがちゃがちゃいろいろなことをぶつかり合いながらやっていくことこそが大事で、その後に便利なツールを使うのがもちろんいいと思いますけれども、

今の子どもたちは、議論が下手ですし、ぶつかっているいろいろお話しするというのも下手だと思うので、そちらの方にぜひ重点を置く教育をしていただいたほうが、私はいいと思っています。

市長：どうぞ。反論してくださいね。フェイス・ツー・フェイスもそうだが、それと両立するなどどんな意見でもいいです。

小野村委員：私も基本的に鈴木委員の意見と同じですけれども、もともとおっしゃるように、総合教育というのは、教科横断教育というところから始まって、総合教育と名前が変わっていったと思います。そういうことを考えると、やはり枠をつくってしまうというのが、本来からは外れるのではないかなと思います。ただ、その枠ではいけないとは思いますが、イエナプランでも、いろいろな教材の蓄積は非常に重要視していると思うのです。そういう教材の蓄積という形で、それを各学校で先生方が主体的に蓄積できるような仕組みというものをつくっていくといいのではないかなと思います。

私が高崎中学校に勤務していた時は、各担任が道德の資料を自作していました。掲示用に使う絵とか、そういうものもつくって行って、それをジャンルとかに分けて、視聴覚室の棚の中にどんどんストックしていったのです。後から授業する先生は、その棚に行って、その中からいろいろな資料を探して、使えるものは使い、自分で作り変えたいものは作り変えるというような形で、それが自然発生的にできていた。そこが非常に重要なのではないかなというように思います。

もう1点、深い学びということについて、何が深い学びかというのと、一つの例を挙げたいと思いますが、例えば、英語の授業で主体的な学びということで、「では自分で辞書を引いてみましょう」というような授業をよく見ます。ただし、辞書を引くということは、先生に教わるかわりに、辞書に教わるということで、受け身であることには根本的には変わらないと思います。

何が大事かというのと、例えば、ジョン・デューイが、「教育は子どもたちを

よく見ることから始めなさい。」といている。具体的に子どもたちの何を見るかという、キャパシティーとインタレストとハビットを見なさいということを行っています。そこで私は、教員向けの研修会でやらせてもらうのですが、「このハビットを皆さん何と訳しますか」と質問します。普通、辞書を引くと、一番初めに癖と出てきますが、この場合、「癖」という訳はバツだと思うのです。辞書を引いて、日本語には直せているけれども、文脈を理解していない。授業の中で、子どもたちの「癖」を見なさいと言っているわけではないと思います。要するに、ここで、ジョン・デューイが言っているのは、ハビットという単語は、アイ・ハブ・ア・ペンのハブと同じ語源ですから、「身につけたもの」というようなニュアンスで言っています。これが英語教育であれば、この子が初めて言語を学ぶのか、もう既に第1言語を身につけているのか、だったら、その第1言語は比較的英語に近いフランス語なのか、英語から遠い日本語なのか、それによっても教え方が変わってきますよと。

それから、私たち英語教師はよく言ってきましたが、中学校1年生で英語を始めたころは、皆さん全員同じ、ゼロからのスタートですなんてこと、私自身平気で言っていました、それは大間違いです。子どもたちは、中1になる時点で、非常に学習に前向きな姿勢、ポジティブな姿勢を身につけている子もいれば、実際聞いてみると、「日本語もできないのに、英語なんかできるわけないじゃん。」と言って、非常に強い劣等感を身につけている子もいます。それは、その子をまず見て、その子がどういう気持ちで取り組んでいるのだろうということを見ろということだと思ふのです。

しかし、残念ながら、今日本の英語教育では、次の単語を日本語に直しなさいという問題がいまだに散見されて、ハビットは癖と書いたら丸というような授業がほとんどだと思ふのです。そういう時に、私はよく子どもたちに、「では、このハビットってどういうことを言おうとしているのか、ちょっと、みんなて話し合ってみようよ。辞書には載っていないけれども、自分なりの

訳を考えてみよう。」と言います。ジョン・デューイは実際に教室に行ったら、私たちに何を見ろと言っているのだろうか、そこを考えてみようというような、これは教師用のワークで、実際子どもたちにやったことはないですけども、子どもたちにはよくセルフヘルプという単語を使います。セルフヘルプって、中には次の女と書いて、正解だと思っているような子もいますので、そうじゃないよと。この「自助」って、どういう意味だと。日本語にするのは簡単かもしれないが、どういう意味だろうというような話し合う時間というのを大事に授業してきました。今、そういったことが、どれだけできているのかということ。

それから、主体的ということで、もう一つだけ申し上げますが、主体的であるためには、個への対応、一人一人の違いに対する対応ということが非常に重要なのではないかなと。今、私は、つくば市において、この個への対応ということが、非常に不足しているのではないかなと。私が就任した当時の予算を見ましても、ICTに関しての予算はとても多かったですけれども、特別支援とか、特別支援というのは、一人一人のニーズに応じるということですから、そういったものへの予算配分が極端に少なかった。そこをおろそかにしては、なかなかその主体的な学びというのは、実現できないのではないかなと考えます。以上です。

市長：どうですか、国語の先生の岡野先生、今のいろいろと、小野村委員が言いたいこと言いましたけれども、言いたいこと言い返してもらってもいいですか。

岡野校長：国語科教師としては、もう大分前に亡くなった方ですが、大村はまという国語教育界の先達あって、私はかくありたいと思いながら、その後を追ったこともあったのですけれども、彼女のしてきた国語教育というのは、一人一人に合った教材を選んで、その教材をもとに、その子の国語力を総合的に高めていくという、本当に夢のような世界でした。もう年代も随分前の

ことなのですけれども、では自分が同じ職業についてやってきた中で、何を思ったかという、彼女は確かに国語教育の先達ではあったけれども、学校という組織の中では、国語の授業しかしない人であったということが分かってきました。ですから、一切ほかのこと、生徒指導のこととか何とかはしない。それで、彼女は中学校だけしか経験していないので、国語の授業を教えることに特化した非常に恵まれた人生を送った方ではないかなと思います。私たちにもそれができるのであればそうしたいかなと思うのですが、今のお話を伺っていると、道徳もやれ、ICTもやれ、いろいろなことを文科省が言うてくるけれども、それを何かに特化できないかというお話から始まったと思うのですが、今教育委員さんのお話をうかがって、申しわけないのですが、それと同じことを感じました。議論が下手だから議論の力をつけよう、それから、枠を取り払え、それから、個への対応を十分にしよう、そういうことは、どれも大事なことだと思うのです。だから、誰も大事でないことは言っていないと思うのです。その中で、私たちが、目の前に40人という子どもを1クラス預かって、1週間のうち、小学校であれば30時間の授業を持ち、中学校であれば、平均20時間の授業を持ち、何ができるのかといたら、本当に難しいことだと思うのです。やりたいのです、枠を取り払ってやる、大事なことですよね。その子に応じた課題を設定する、それが教員1人で何人まで対応が可能だとお考えになりますか。一人一人の中から湧き出てきたものを、一人一人つぶさに拾い、個に対応しながら、結局言ってみれば、その子なりにフレームをつくってあげたり、その子の学びを追随してあげたり、支援してあげたりということをしてほしいという思いで、教育委員さん方、おっしゃるのだと思うのですけれども、私は、1クラス5人までで午前中だけの授業という状況であれば、それは可能だと思うのです。子どもたちが本当の学びたいことを自分で足を使って探してくる、それから、子ども一人一人と入念に面談をする、場合によっては保護者の考えも聞く、そういうことをし

ないと、一人一人の子どもを真に支援していくということにはならないのではないのかなと思います。今、委員さん方がおっしゃったような教育を実現するのであれば、私はあえてそういう仕組みを整えるための動きを起こしていただきたいと思います。5人までです。そうであれば、可能だと思うのですが、でも、それと対極にあるのが、やっぱりある程度の人数を集めて、それをちょっと言葉は悪いので、勘違いしないでいただきたいのですけれども、効率よくいろいろなことを学ばせることによって、日本の国が繁栄を支えてきたという時代的な背景もあるわけですよ。これだけ識字率が高くて、これだけいろいろなことに真摯に取り組む、そういう国民ってほかにないのではないかと思います。日体の集団行動で有名な清原先生が、ソチオリンピックで、集団行動の指導に行ったときに、団員が集まらないのだそうです。遅れてきて言い訳をする、それから報酬もないのに、何でこんなことやらなくてはいけないのだという、自分の国の名誉とか、気概とかということとは関係ないわけです。そういう国民ですらいる。そこから考えると、日本は、世の中でトップだとは、いろいろなこと考えるとと思いませんけれども、少なくとも日本の今までの教育のあり方が、今の国の繁栄を支えてきたという現状も考えると、一概に何がよくて、何が悪いとは言えないのではないかなというふうに思います。ここまで、岡野個人の考え方で、私たち教職員は、与えられた、置かれたところで咲きなさいではないですけれども、与えられた枠の中で、できる最大限の努力をする。だから、ブラックだとか、過労死ラインだとか言われてしまうわけですよ。それだけまじめな先生が教員になっているわけです。それを行政の立場から、応援していただきたいというのが、私の校長としての思いです。いろいろなことをやらなくてはならないのは分かっています。どうすれば一番いいかということも考えたことはあります。もうそれは個人個人でいろいろな違いもあるでしょう。ただ、置かれた状況の中で、最大限の努力をしている教職員にしっかり向き合っていて、行政

## 様式第1号

の音頭をとっていただければ、それが強いては、子どもたちを幸せにすることかなと私は考えています。以上です。

市長：おもしろくなってきました。ありがとうございます。校長先生方、どんどん御意見を言ってください。

小野村委員：最初に教育委員になったときに、教育委員というのは、学校や先生方を働きやすくするためにいるのだということを何度となく、複数の方からお話を聞きました。それは、ある面、真実だと思います。ただ、よく考えてみてください。私たちがここでお疲れさまです、皆さん、大変ですねとやっているだけであつたら、今の全国で起きている教育委員の機能不全というのは、解決できるでしょうか。実際に、もしいじめがありましたと。実は私、ここに朝方メールが1本ぽんと入ってきまして、今日ここでこういうことを言ってほしいというようなメールを持ってきていますけれども、いろいろな声が集まってきます。そのときに、いやこれはクレームだから言いませんではなくて、ここでやっぱり意見を戦わせていくこと、今、一生懸命頑張っている先生を応援してほしいということだったと思いますが、それはもちろん分かっています。私も教師をやっていました。私もなかなか大変な学校で、それなりの経験もしてきました。学校で当時は、廊下をオートバイが走っているような状況もあったわけです。そういう中でも、そういう授業を、私なりにできる範囲でやってきました。ここで今話し合うべきことは、やっています、やっていませんという話ではなくて、もちろん先生方、一生懸命やっています、やっていることはよく分かった上で、一つ一つやっぱり課題を挙げていくことだと思います。そういう意味で、この間、電子黒板のプレゼンの中で、今「ごんぎつね」は、撃った後の兵十が「しめしめ」というように答えを決めていないということをまず教わって、私の娘たちのときには、「しめしめ」が正解で、「殺すまでは思っていなかった」というのは、バツとしてテストで採点されていましたが、そういうのが変わってきているのを聞

いて、喜んでおります。

ただ、まだそういう面は、日本の教育の中であって、ICT と関連していえば、ソクラテスは、本、書籍、文字の普及が始まったときに、それに猛烈に反対をしているのです。文字になったときに、言葉は死んでしまうと。そういったものでは、真の学びはできないということを言っています。今、この当時、ソクラテスが述べていることは、今 ICT 教育を取り入れようとしているときの議論で非常に共通しているところがあって、これは一読に値するなと思っていますのですけれども、そういった点からも、今までの国語教育が悪いとかいいとかという以前に、直すべきところはあるのだと、私たちは改善を重ねていかなければいけないのだという前提でこの後お話ができたらいいと私は思います。

市長：どうぞ。

松本校長：ちょっとつくばスタイル科の話に戻ってしまうのですが、もともと総合的な学習の時間ということで、全国には知れ渡っているかと思います。その中で、最初のころ、小学校でやっている総合的な学習の時間の授業が、あるところでは、中学校でそれが行われたという事実もあって、小学生と中学生がやる総合的な学習の時間内容が全く同じのような現象もありました。それをやはり1年生から9年生まで、小学校から中学生、義務教育で系統的に行おうということで、つくば市では、つくばスタイルが9年間の系統性を考えた、モデルともなる単元構成ができたと自分は認識しております。そのことによって、やはりある程度、同じ内容でも、レベルが発達段階に応じた、レベルアップしたものができているのではないかなと。そういった意味で、先ほども課長からありましたけれども、やはり学園自体で、任されているという範囲があると思うのです。そこで、その地域の特異性とか、実態に応じた対応ができるのではないかなと考えております。決して枠にはめるのではなくて、やはり子どもから出た発想を生かして、単元が構成されていくと思

います。やはり大事なものは、もともとつくば市としては、市の方針があって、つくば市の子どもたちをある程度同じ水準といいますか、同じ教育をやって、学園ですので、小学校でいくつか三つ四つあった小学校で、同じ総合的な学習の時間、つくばスタイルで体験したことを中学校でやるというような形にするためにも、そういった一応統制の取れたものが必要でないかということであると思うのです。本当に、直接体験、自分も大事だと思います。授業を参観していくと、やはり、インターネットで引っ張ってきたものをただ発表しているだけで、直接体験の良さを感じていない授業があるのも事実だと思います。ただ、ICTもさっきから出ていますけれども、ICTの中でも、その直接体験をしたような体験ができるという、視覚に訴えるという場面では、すごく効果があるのも事実だと思います。これがずっと1時間、その部分、部分で、効果的な利活用というか、そういうものが、教師の今度裁量に、授業力になってくるわけですが、そういう構成として。ですから、現段階で、やっぱりなくてはならないツールかなと自分では思っております。それから、主体的、対話的な深い学びに関しましては、主体的というのは、なかなか捉え方が難しいと思います。ある先生によりますと、自分が分からないこと、友達に「これ何？」と聞くのも、もう主体的な行動である、それを判断するというようなことも言われております。ですから、自分は自らの考えを持つことが、主体的な行動につながっていくのではないかなと思っております。対話的学習が必要なものは、やはり友達の今つながりがない、友達と話し合っ、いろいろな表現力、理解力を高めていくのは、そういう場が必要だということで、よく授業で4人グループをつくっていて、優秀な子がリーダーになってまとめて発表して、ただ1人はボーッと見ている、それは、対話的な学習ではないと思います。意見を言って、総合的に意見がこう浮かんで来て、そして、それがやはり今後に生かせるような、自分で知らなかったことが分かったと、どんどん深い学びにつながっていくのではないかなと、自分は解釈

しております。ですから、これからさらにつくばスタイル科も改善は必要だと思いますが、そういった総合的な学習の時間の課題を解決するための一つの手段として、つくばスタイル科ができてきたのではないかと認識を持っております。以上です。

市長：先日、我々前野小にお邪魔して、今、最初に飯島先生からも小規模校で、単学級で個別対応していて、結果として不登校もないのだという話もありましたけれども、いかがでしょう、今までの議論を聞いていて、前野小の今の状況と、こういうことをやると、我々が一番なりたくない文科省になってしまっているような御批判が岡野先生からあり、今までの議論の中からどんなことを今感じられていますか。

飯島校長：先日、市長には、本校を実際に見ていただきましたので、その空気感みたいなものを分かっているくださって、教育委員の皆様もありがとうございます。いくつか、お話の中で柱があったかなと思います。主体的、対話的で深い学びというのが、逆を言えば、受け身の学習、対話もしない、暗記だけの学習、そこで、どちらかといえば、その学びを受けてきた我々教師集団が、自分たちが受けた教育ではない教育、新しい授業を創造しようとして、若者はもう違うと思うのですが、この50代は、自分が受けた教育ではない教育を一生懸命やろうとしているわけなのですけれども、そこについては、非常にできているのではないかなと思っています。見た目のグループ学習になっていたら、主体的で対話的な深い学びになっているという単純なものではなくて、黙って本を読んでいても、そのときは主体的で対話的で深い学びかもしれません。作者と対話をしているのかもしれない。ですから、見た目にとられずにやっていくのだということは、先生方とはよく話をしています。でも、形から入ることが、若い先生には大事なので、1時間の授業の中で、グループ学習は必ず1回はやりましょうというようなことも伝えてはおります。それから、ICTの活用と低学年の話も出ていたかなと思うのですが、実際

問題、低学年だとまだテレビ会議というのを、主体的にやるところまでは行かないのですが、AETの先生との授業をこの間参観したときには、すごく上手に電子黒板の中で、いろいろな絵カードを回して行って、子どもたちが絵を見ながら発音をして、楽しそうに挨拶をしている様子を見て、このツールとしては、非常にすぐれたツールであると思います。ただ、授業の中でずっと映っているわけではなくて、導入の最初の10分間程度でした。その後は、本当に教育委員さんがおっしゃるとおり、フェイス・ツー・フェイスがすごく大事な時期でもありますので、顔を見合って、握手をし合って、授業が進んでいたと思いました。それから、つくばスタイル科、つくスタと、私たちは呼んでいますけれども、さっき松本校長先生からもありましたとおり、つくスタがなくて、総合的な学習の時間だった時、自分は担任をしていました。中学校で迎えた子どもたちに、中1は福祉だから、アイマスク体験をしますと行って、意気揚々と子どもたちに、アイマスクを渡して、これをして校舎を歩きます、友達と手をつないでと言ったら、先生、それはもう小学校でやりましたって言われました。ああそうかと思って、と行って、三つの小学校のうちの一つの小学校しかやっていないわけで、では、君たちは2回目だから、さらによく考えながらやってみましょう等と言ったのですけれども、そういう経験がいくつかあった中で感じたことは、つくスタというものができて、9年間総合的な学習に一つの柱を私たちに与えてくれたことをすごく感謝しました。やることが目的なのではなくて、6種12の力をつけるためのものであったというふうに認識しているので、では果たして、その力をちゃんとつけられたのかといえば、ただつけられず、表面的なことに終始していた自分の力のなさというのも反省もするのですけれども、子どもたちは、その活動の中で、12の力の中の何かは身につけてくれたのではないかなとは、思っているところです。自分の体験からだけの話ですいません。以上です。

市長：ありがとうございます。校長先生、この間まで、土浦にいらっしやって、

## 様式第1号

また久しぶりに戻ってこられたのですが、そのあたりで、つくばを見て、少し思うこととか、この辺、つくば、いいところだなと、この辺改善できるなどというのは、今のうちに感じていることなど、もしあれば。

飯島校長：では、よろしいでしょうか。

市長：ぜひぜひ。もう全部言ってください。別に、最後まとめはしませんが、まだもう少し拡散させたいと思います。

飯島校長：つくばというまちは、研究学園都市なので、日本から注目されている科学技術の先端を行かなければいけないまちなのだと、他のまちに行っていました。他のまちに出ていくと、つくば市って進んでいるのよねって言われて、そうですと答えていたのですが、私が出ていた土浦市は、ICTに関しては、残念ながらつくば市より土浦市のほうが、率直に申し上げて進んでいました。全ての教室に張りつけるだけで電子黒板になるマグネットシートとプロジェクター、それから実物投影機がありました。先生方は、このノートいいねというと、ぱっと持って行って、いいって子どもに聞いて、いいですと言われたら、すぐ実物投影機に映して、このまとめすばらしいねって紹介していました。家庭科の先生は、玉結びができない子どもたちに、実物投影機を通して自分で玉結びを大きく映して見せていました。そんなふうで、電子黒板はもちろんのこと、何か日常的に、全然当たり前のことみたいに使っている土浦市を見まして、つくばも多分これぐらい進んではいるのだろうなと思って帰ってきたら、前野小学校には、電子黒板が各階に1台ずつしかなかったって、先生たちに、「何で使わないの、もっと。」と言ったら、「でも、結構かぶってしまうので、調整するのが面倒くさくて。」なんていうことを言われて、もうちょっと自然に使えるといいのにと思ったりもしました。九重小学校には全教室に入っていましたので、そこは便利だなと思っていたところですよ。

市長：どうぞ、では、はい。

柳瀬委員：先生方、本当にそれぞれ現場で考えながら、葛藤もありながらやっておられるのだと思います。その学びについては、一つだけ私、指摘しておきたいのですが、義務教育学校を英語でコンパルソリーというふうに訳しました。これは文科省で、コンパルソリーという言葉を使えということだったというふうに聞きます。この前、みどりのに行った時にも、学校には、みどりの学園スクールと書いてありましたけれども、プレゼンのときには、みどりのコンパルソリーって書いてありました。コンパルソリーという言葉にちょっと皆さんで注目していただきたいと思います。これ強制というような言葉ですし、コンパルソリードラフトといいますと、これ、徴兵することを言います。その辺で、コンパルソリーという言葉は非常に重要じゃないかなと今考えています。いろいろ考えていたら、私たち、コンパルソリーって知っていたのです。今まで。フィギュアスケートの規定、あれコンパルソリーって言っていました。コンパルソリーで図形を描いて規定どおりに技術を争うもので、今コンパルソリーなくなってしまったのです。あれ、外れてスーッと行ってしまったら、バツなのです。メダルもらえない。それをこなした上で、フリーの演技があるのです。フリーは表現から何から、自分の最大限の能力を発揮して、フリーの演技をするわけです。このコンパルソリーとフリーのことを私たちよくもう1回、振り返る必要があると思うのです。今、どちらかというと、やっぱり電子黒板とかそのデジタル教材って、コンパルソリーじゃないかと思うのです。子どもたちが自由に発想して、勉強していく、もう総合学習だから、あなた興味あることを何でも勉強していいよというのはフリーですね。そうではなく、教材がどんどん進めば進むほど、コンパルソリーになっていく。デジタル教材も、私この前、チャレンジスタディーをやってみたのですけれども、答えを出さない限り、次に行けないのです。もう分かっているのです。何か、ひねくれているから違う答えを押ししたりしたら、全然先に行けない。教科書だったら、ぺらぺらめくりながら、全体を見渡

しながら勉強ができますが、デジタル教材って、ああ、そうか、これは相手方に順応し、服従しない限り、学習は進まないのかなど。確かに数学とか理科だったら、正しい答えってはっきりありますから、もうそこでオーケーなのですけれども、国語とか社会になると、古墳時代の何とかかんとか出てきたとき、結構違った見方だってあるじゃないかと思ったので、そういうのを全部排除していかないと、教材は進まないのです。それが物すごい大きな問題だと思います。電子黒板については、私は、教科教育、教科担任はどんどん使っていただきたいなと思います。つまり、5・6年生以上、それから中学、それはもうできると思います。ただし、子どもの発達段階からいったら、4年生ぐらいまでに、余りメディア、メディアって言わないほうがいいのではないかと。皆さん御存じのように、もうみんな子ども、ゲームとかソフトとか、もうスマホなんかでも平気でどんどん使うわけです。メディア中毒なのです。学校でもそれで、メディア、メディアって今言っていますけれども、私は、メディアフリーにしてあげたい。小学校の低学年は、遊ばなければだめですよね。みんなでワイワイガヤガヤやらないとだめです。そこで知的なことばかり教育するというふうになると、これは発達段階、もうこれ教育に携わっている人たちは、みんな子どもの発達段階というのを知っているわけじゃないですか。そして、小学校の中学年になったら、それこそさっきおっしゃられたように、人間関係が大事ですから、ギャングエイジで、あいつはこうだ、ああだと言いながら、やっぱり集団で学んでいくことをしなければいけないと思う。そこでメディアが入ってきて、本当、取っ組み合いの相撲をとれないような、そんな状態になってしまっている。それではまずいと思うのです。いざ、知的なこと、バーチャルなことをどんどん学ばなければいけなくなったときには、本当にそれを導入すればいいと思う。なので、私は、小学校低学年、中学年では、電子黒板はむしろないほうがいいのではないかと。それ以後、どんどん導入したらいいのではと。さっき、二の宮小学校の先

生が、子どもに向かうこと、岡野先生、子どもに向かっていくという、一番大事だと言いました、すごくポジティブに向かっていくという、おお、向かっていくと思いましたがけれども、向き合うだと思うのです。何か子どもと向き合う対面とか、対話、そのディベートとかディスカッションの前に、やっぱり一人一人が対話するというのがないと、思考もその子の人格形成とか、そういうことができないのではないかなと思うのです。それで、ぐるっと一回りしまして、その人的支援ということを、皆さん、おっしゃられました。私は、優先順位として、教育の環境をきちんと整えるために、今一番必要なのは、電子黒板ではなくて、やっぱり人的支援だと思います。ソーシャルスクールワーカーとか。文科省の来年度の予算の中で、スクールサポートスタッフの増員をするとか、部活動指導員を9,000人とか、もう人的支援ばかり言っているのです。これは、つくば市も全く同じ時代的流れだと思います。それから、さっき学校地域連携のためのコーディネーターということをおっしゃられましたけれども、本来ならば、社会教育指導員の方がやらなければいけないですよ。だから、それがやれる体制になっていない。人的にも足りないのだと思います。どんどん社会教育指導員がそれぞれの学校に出向いて、どんなことを地域と連携したらいいですかということ、もう本来その枠でやらなければいけないのだけれども、できていないと。それもやっぱり人員をふやさなければいけない。特別支援指導員だって、もっと必要だし、ちょっと抜けていたのが、学校管理員さんです。昔用務員さんと呼ばれていた人、この人が、学校のいろいろなところを細々と環境整備をしていたのだけれども、それが委託になってしまったところと、学校管理員さんが足りないところと。この前、ちょっと話をしていたら、学校管理員さんが、腰を痛めてしまって、草刈りができないから、校長先生がずっと草刈りをしているという話を聞きました。2人いたら助かるのだけれどもと。やっぱり学校管理支援員さんも、得意分野がありますから、2人、3人ともしいたら、学校のこと、す

ごくできるし、先生方も子どもに向かう時間がふえるのだと思うのです。その辺どうでしょうか。その学校管理支援員あるいは学校管理委託のところは、東京都なんかだったら、もう教育者の側面を認めて、子どもと接することまで認めているのです。管理だけというのではなくて、お手伝いするわけです。さっきのバスの乗りおりをサポートするとか、いろいろなことができる人なので、そういうところに予算を充実してほしいなと思います。済みません、一遍にしゃべってしまいました。

市長：ありがとうございます。ちょっと人の問題は、時間をかけてまとめてやりたいなと思っているのですけれども、まだ倉田先生、御発言されていないので、じっくり聞いていましたけれども、どうぞ。いろいろなお立場から、御自由にどうぞ。

倉田委員：私も、前は現役で学校長をやっていましたが、先生方、言われていること、よくわかるつもりです。深い学びや主体性などもう言わなくても、皆さん、当たっているというか、そういうもので。私は、簡単に言えば、教員というのは、人づくりだと思っているのです。どうつくっていくか、その人を、それぞれに、一人一人のものをピックアップしてあげて、どう育てていくかと。みんな違うので、個性が全部違うので、人それぞれに合ったものを導きしてあげると、そういうことが私は究極なのかなと思っているのです。その時に、どういう教育をそのときに展開すればいいかというのは、これは非常に難しい問題です。環境も、物的環境もあるだろうし、人的環境もあるし、やっぱり総合的にそういうものがないと、なかなかうまくいかない部分も多々あるのかなというのは、今皆さんが話している中で、私も感じます。ただ、その時に、最終的には、私は、人間性だと、私自身は思っているのです。その中で、どういうふうに人が人にどうかかわっていくかということが基本にはないと、難しいのかなと。だから、物だって使いようですよ、どういうふうにその場でどういうふうに活用するかと。先ほども、土田先生からもありま

したが、そういう使い方も含めてのその活用、充実とか、そういうものも当然その中には入ってくると思うのですが、私は、学校の職員に、教員になった場合には、やはり人間関係づくり、人づくり。だから、人とのつき合いなのです。人としてどうつき合っていくかということが、基本にまずないと、成り立たないものなのかなと。そういうものを教えていく、気づかせていくというのも、教員の重要な役割ではないかなと、そう思っているのです。細かく、今、いろいろなことを言っていると切りがなくなってしまうので、あれなのですが、やはりそういう面では、非常に教員の資質の面も、これからは非常に重要になって、どういうふうにその資質を育てていくかという、そういうことも行政も含めて、やはり教員のあり方ということもこれから議論していく必要があるのかなと思うのですが、そういう面では、今、非常に教員のなり手が少なくなっていると、それが現実なのです。それも問題なのかなとか。それは、多忙感とかいろいろなものがありますよね。そういうものをやはり乗り越えて、教員になりたいと、そういうものを示していくのが私たちなのかなと、本当に、教員というのはすばらしいものであるということ、そういうことを分かってもらうというか、示していくのも、これからのあり方なのかなと。どうすればそれができるかというのも、行政も学校も含めて、一緒に協議して、一つの地区、つくばから発信していくようなそういうものでありたいなど、私、今話の中でつくづく思っているのです。ですから、そういう面では、私は、ある意味、自由かなと、自由と言ったらおかしいのですけれども、いろいろなことを試してやっていく地区なのかなと、私はそう考えています。ですから、これやっちゃだめとか、そうではなくて、いろいろ試してみたことで、課題が見えて、どうしていったらいいかと、そういうものを議論する場であってほしいなど、そういうことを実践できる地域であってほしいなど、そういうことが、私一番感じている。だから、学校の校長としても、自信を持って、私の教育はこうだということ、示していくようなそう

いうパフォーマンスがこれからはなおさら私は必要なのではないかなど。つくばの教育というベースは当然あるわけですから、それを踏み越えてということはないと思うのですが、その中で、やっぱり自由裁量権ではないですけども、自由に自分の学校ということをつくり上げていけるようなそういうシステムにすると、私はいいのかなど。そういうために、どうしたらいいかということは今後議論する場を設ける、話し合う機会があれば、現場の先生方にあるといいのかなど思っています。もう細かいこと一つ一つ言っても、私も切りがないので、時間がなくなってしまうのですが、第一感想としては、私はそう思って、聞いていました。

市長：ありがとうございました。全委員の皆様から、人の問題というのは、やっぱりすごくあって、勝手な要求をするけれども、人がいないというのが、やっぱり多くの現場の悲鳴に似た叫びなのかという感じはしています。では、どこにどういう人を具体的に配置していけばいいのか。例えば、石黒先生からは、コーディネーターのような人を配置してほしい。岡野先生からは、校務支援システムがあれば、かなり事務の負担は軽減するだろうという話もありましたし、あるいは全体的に特別支援も足りなければ、司書がやっぱり足りないという声もあり、土浦や牛久は常勤だから、いい人はそちらにむしろ取られてしまうという声もあって、学校の図書室の環境がまた悪くなってしまっている。あと部活ですね。どこにおいても、もう絶対的に人がどうも足りないのだろうと、その中で、教育者たちにはどんどん要求をします。我々はオランダを見てきて、こういうことをやりたいなと思っていたりすると、また新しいことかってなって、こうやってきっとギャップが生まれていくと思うのです。それをしないために、何をしていかななくてはいけないかということを考えないと、せっかくいらしていただいた意味がない。これだけいろいろ先生方から御要望いただいた中で、どこからどういうふうにしていいのかということ考えた時に、教育局は、人的なものに対しては、来年度予

様式第1号

算は今どういう要求をしていますか。

教育局長：まだ細かいところを財務とは詰めてはいないのですけれども、人的配置で一番まず図書支援員、図書の補助員については、中学校も厚くしたいということでお願いをしています。それから、特別支援教育の支援員についても、現状に合わせて、更に増やす必要があるだろうということを考えています。英語の教科が始まるので、AETもさらに増やしたいということで考えています。ソーシャルスクールワーカーについては、2名できれば配置したいと考え、財政と調整しています。あとは、相談センターの相談員も今は親4人、子ども3人なのですけれども、どちらも4人、4人にしたいということで、1名の増を考えているということで、できるだけ人的には、進めたいと考えています。

市長：校務支援システムは、配置状況などどういう状況ですか。

教育局長：今まだ予算は組めていない状況で、実際には、義務教育学校にだけ業者の方をお願いをして、私たちが使うものを決めたいので、試行で貸してくださいということで、使用しています。

市長：無料ということですね。

教育局長：そうです。

市長：岡野先生、どの辺で校務支援システムに期待している部分がありますか。

岡野校長：データの一元化というか、出席簿をつけて、通知表にそれを転記するために、改めて一覧表を作成し、それからそれを要録に反映するというような、これは一つの仕事ですけれども、それが、出席状況を入力すれば、全てにデータが飛んで、担任は大いに助かります。それから、図書室への来校状況など子どもたちのデータが、一つのところでそれを入力すれば、誰でも見ることができて、誰でも引き出せて、セキュリティーの関係もあるでしょうけれども、そういう共有化してものが使えるというところで、私は大いに期待をしています。特に、中学校にあっては、担任の知っている情報をその授

## 様式第1号

業に出ている各教科の担任が即座に見られるということが非常に重要なので、それが全校にあれば、非常にいいかなというふうに思っています。それから、すいません別の話になってしまうのですが、

市長：どんどん言ってください。

岡野校長：人を増やすといった時に、ぜひお願いしたいのは、その安定的な雇用をお願いしたいということなのです。というのは、うちにいる講師なんかも言っているのですが、そのつくば市に本当に勤め続けられるのかどうか分からないという時に、他の町村から声がかかれば、不安ですからそちらに行ってしまうよね。それから、特別支援員も、今年も大幅に増加していただきましたけれども、変な話ですが、よく御自身の職務が分からなくて、ちょっとしたトラブルになっている学校もあつたり、保護者との間にトラブルが生じているところがあつたりする。質的な高まりというのも、単年度の契約ではなかなか見取っていくのは難しいだろうと。そこは、人件費が一番大変なところだと思うのですが、その安定的な雇用の中で、資質を伸ばしていったり、その淘汰していったりということが、つくば市の子どもたちのためなのかなというふうに思います。それから、先ほどから、優先順位という言葉が出てきて、私引っかかるのですが、お金に限りのあることなので、そういう考え方は行政の上では当然だと思うのですが、人を増やすから電子黒板は後だとか、電子黒板を入れるから人は後だとか、ということでは、現場はないと思うのです。どちらもお願いしたいというのが、勝手な言い分です。以上です。

市長：ありがとうございます。どんどん言っていただいて。どうぞ。

小野村委員：今のその常勤化というのは、とてもよく分かりますので、先ほど私が、ちょっとメールをいただいたという方も、市内で、ボランティアをずっと長くやっていたらしゃったボランティアグループということで、送られてきたのですが、やっぱりボランティア関係者の中では、学校や教育委員会

の責任者が不在のまま、今の学校が抱えている問題が、ボランティアに丸投げされているのではと不安に思う声が多く聞かれます。正規に人を雇うことで生じる人件費もボランティアに課題解決を押しつけてよしとすれば、人件費が少なくて済むと考えているのではないかと感じることもさえます。この方々、一生懸命協力をしてきていて、今だんだん人も増やしていきたいと思っているけれども、せめて交通費だけでももう少し出ればとかという声も、しきりに皆さんおっしゃっています。

もう一つは、やっぱり何かあったときに、先ほどは、昼休みとかの見守りもとても助かると思うのですけれども、そういうときに、もし万が一けががあったときは、誰がどう責任をとるのだろうというのは、やっぱりボランティアさんとかの場合には、非常に気になる場所だと思うので、地域を巻き込んでということで、本当にそれはとても大事な概念だと思うのですけれども、そうやってやっぱり環境整備というのは、やはり私たちが考えていかないと、せっかく協力したいと思っている方が、なかなか一歩踏み出せないという環境にあるのも事実だと思います。

市長：社会教育指導員の話がさっきちらっと出ましたけれども、これ、教育長も積極的にという答弁を以前していましたが、社会教育指導員の学校現場との関わりというのは、今どのようになっていますか。

教育局長：ちょっと課長がいないですけれども、今のところちょっと薄いといえますか、まだ不十分だなというところを課題として考えていまして、できたらやっぱり社会教育指導員の全体のスキルをアップして、みんなで一元的にまとまって取り組めるような体制をつくらなければいけないなというふうに考えていまして、ですから、各交流センターにではなくて、こちらに引き上げて、みんなで議論をしながら、研修をしながら、みんなでやることを、また、学校とかかわって、学校に返していけるようになったらいいのではないかとということで、今体制をちょっと考え直していこうということで、

やっているところです。

市長：確かに、その安定化、今、岡野先生がおっしゃった部分もすごく大事な部分で、逆に虫食いみたいな感じで来られたりすると、かえってその調整で今度手間がかかるかとなんていうことも、学校に限らず起きていることだと思いますので、そういうことも含めて本当に考えていかななくてはいけないのかなと思います。今、お話を伺っていると、スクールボランティア制度にしろ、今の指導にしろ、あるいは退職したOBにしろ、教育長がずっと言っていることですけれども、やっぱり地域がみんなで子どもを育てていくということをしていくということしかないなと改めて思っています。すべてを行政で賄い切ることは、なかなか限界がある中で、まだまだ地域のいろいろな資源を総動員できているかというところ、まだかわりが持ち切れていないところも多いのだと思います。地域でどういう人たちがいるのかということも、行政としても整理をした上で、必要な人については必要な人で、やっぱり考えていくということをしていきたいなと思います。教育長、ここまでのところはいかがですか。

教育長：いろいろな意見をありがとうございました。話すと1時間ぐらい話したいのですが、私の前歴というのは、皆さんも御存じのとおり、研究者でした。教育社会学の研究者でした。そういう立場から、私は、ズームをずっと引いて、今の現行の教育制度は一体どういう問題を抱えているのかということを見るようにしながら、その中で、つくば市の教育をこれからどうするかということを考えて続けてきているわけで、それを象徴的にいえば、市長が世界のあしたが見えるまちをつくるということを言っていますので、私は「世界のあしたの教育のトップランナーにつくば市はなります」と。そのために、2020年から新しい学習指導要領でスタートする。その折に、今、我々が考えている教育大綱をそれに合わせながら、今の現行の教育制度から一歩でも抜け出すような形の教育を実現できるように頑張りたいと思っているところで

す。そこで終わってもいいのですけれども、柳瀬さんから、コンパルソリーという言葉が出ました。それから岡野先生からは、私たちは今与えられた枠の中で、必死になって頑張っているのです、その結果、日本の繁栄を支えてきたのですというような、かなり重要な指摘がありました。私は、今の教育制度というのは、たった150年前から始まったもので、何が狙いかといえば、経済発展、産業社会の発展そのものを支えるための人間の選別です。それをやってきたというふうに思っていて、これからもやり続けることはもう不可能だろうと思っているわけです。だから、それとは違う教育をつくばからスタートさせたいと思って、皆さんの意見をずっと聞いていました。私は、自分なりの考え方を持っていて、まず一つは、どの子どもどの子どもその子の持っている特性そのものを丸ごと認めて、その子がウエルビーイングな、あるいは幸福な、こういう人生でよかったと思うようなことを本人自身が実現できるような力をきちんと育ててあげる、経済発展のために使えるような、役に立つような能力ではなくて、本人そのものが、こういう人生でよかったというようなことを、自分の力でまず実現できるような力をきちんと学校で育てることがまず第一だと。これは、ケーパビリティという言葉を使いながら、「善き生の実現能力」をきちんと育てましょうということをしてきました。しかし、誰もが、自分のことを自分で全部できるわけではありせんから、社会力、ソーシャルコンピテンス、あの人はこんなことを実現したいと思っていることをきちっと理解した上で、それをお互いに助け合いながら実現させることが、そういう力を育てること、そういう能力を私は、人と人がつながり、社会をつくっている力と言っていますけれども、そういう能力を育てることで、私は互惠的協働社会を将来的には実現できる、そういう教育に切りかえていきたいと思いますと言ってきたわけです。校長先生からはズームをずっと現場に近づけた発言がありました。その話をずっと聞きながら、全体をトータルに見るような形で考えていますけれども、皆さんが現場で苦

労していること、何が今必要なのかということをしつくりと聞いたつもりで  
おります。そんなことを踏まえながら、2020年からつくばからスタートでき  
ることをやりたい、つくばスタイル科の話もありましたけれども、つくばス  
タイル科で育てる能力は、社会力を育てることに通じると思っていますし、  
イエナプランからヒントを得たことを、つくば市でいかすことを、まだ公表  
していませんけれども個人的には考えています。文科省を説得しながら、そ  
の一部でも実現できる方向で考えたいと思っておりますので、これからも皆  
さんの御協力をぜひお願いしたいと思っております。

市長：イエナプランという言葉が出てきているので、ちょっと一応話をしてお  
きますと、この総合教育会議で、以前、イエナプランの話が出ました。オラン  
ダのオルタナティブ教育の一つとして、今注目されていて、もともとドイツ  
のイエナの学会で発表されたからイエナプランという名前がついているだけ  
なのですが、いくつか特徴がありまして、例えば、異学年で1学級を構成し  
ていて、1クラス二十数人のところに5・6・7歳が一緒にいるのです。そこ  
で子どもたちは、教え合いながら学んで、先生は一斉授業のようなものは一  
切しないで、何か教える時にも、小グループになって、子どもたちは、時間割  
を全部自分で月曜日に自分で考えて決める。仕事の時間と呼んでいますが、  
勉強をする時間とあと遊びの時間とお祝いをする時間などがあって、まさに  
日本が目指している主体的で対話的な深い学びを実践していると思われるも  
ので、教育長、教育局長、副市長、本松先生と一緒に見てきました。確かに、  
こういうことができたらいいのだろうなと感じました。そこでやっていたの  
は、結局文科省の考えていることは、実際実施しているようなのです。例え  
ば、子どもが石ころを拾って、それに興味を持ったら、そこから授業を始め  
る。それがこういう部分だったら、理科のこのカリキュラムに当てはまる、  
これは社会のこういう部分に使える等ということで、カリキュラムを解釈し  
て、先生の頭の中でそのカリキュラムを満たしていくと、それによって子ど

## 様式第1号

もは、自然に1年間のカリキュラムを満たすそうです。これは相当大変なことだと思いますけれども、ちょうどそれで岡野先生から、今5人までだったらできるだろうという話がありました、それで午前中と。確かに、学校の先生、帰るのが早いと言っていました。もう4時から5時ぐらいには必ず帰っていると。授業は3時ぐらいまであるそうですけれども、ずっと授業をしているわけでもない。宿題もなかったりというような中でしたが、二十数人はいましたけれども、多分先生方もやっぱりそういうことをもっとやっていきたいし、子どもの学びにいけることをやりたいという中で、それが何かただの本当に押しつけになったり、やれやれ言われても、これ以上学校はできないということが現実だと思います。実は来月、そのイエナプランの共有として総合教育会議で、実際に行った先生が報告してくれるので、可能であれば、ぜひ先生方いらしていただいて、これについても自由に御意見いただけた方がいいのかと思っています。何か外で見てきたものいいって、そんなの現場じゃとんでもないよみたいな話になったりして、それもギャップになっていってしまうと思いますので、ちょっと日程等後で御連絡させていただきますので、どういう形がいいのか、遠藤先生に相談して、どういう皆さんに来ていただくのがいいと思います。一緒に我々も学びながら、どういうことができるのかな、こういうことは無理なのかなとか、やっぱりこれは国が変わらなくてはどうしようもないなど、我々の当座のところの問題は、とにかくこの文科省の指示が少なくなると、どうにもならないというのが、当座の共通認識ではあるのですが、我々にできることは何だろうということを考えていきたいので、ちょっとその辺は、また改めて相談をさせていただければと思います。人については、教育長、教育局長とも相談をしながら、何ができるか検討したいと思います。小規模校にはきっと小規模校の欲しい先生の形があるし、大規模校には大規模校の欲しい形がある。それは先生なのか、別の形の仕事なのかというのも、それぞれあると思いますので、

## 様式第1号

内部と厳しいやりとりはすることになりますが、もう少し皆さんに伺いながら、何か少なくともきちんと予算の形で反映させていきたいと思います。

教育長：先日、私のところに、教職員組合の方々が6名来まして、1時間半ほどいろいろ話をしました。その時に、あなた方しかできないのだからこの二つはしっかりやってくださいと言ったのは、今、1クラス40人の基準でやっていますけれども、これを半分にするように、全力を挙げて頑張ってくださいと。だから、1クラス20人になったら、単純に計算すれば先生方が一気に2倍になりますね、今の。これをやらない限りは、いろいろな過労問題は解決できませんよと。これは、あなた方しかできないことだからしっかりやってくださいというのが一つ。それから、もう一つ、全国学力テスト、これができるだけ早くにやめるようにと。このプレッシャーが相当に現場には強い力としてかかっていますので、これも即やめるように、これもあなた方、組合の方々がやらないとだめなのだ、この二つはしっかりとやってくださいということを、お願いをしたところです。きょうは、その話は出てきませんでしたけれども、皆さんは、そのことも全部頭の中にあつてのことだったと今理解しています。もう一つは、ゆっくり話をするともう1時間かかるのだけれども、今の教育制度というのは、さっき柳瀬さんがコンパルソリーと言いましたけれども、まさに強制教育ですから、実態は。150年前から始まった教育制度はまさに強制教育であるということ、だから、制度そのものが極めて不自然だというふうに私は認識していますけれども、その点も何とかつくばから、できるところから、できる形で変えていきたいと、そうでない形の教育を実現していきたいと考えていることも申し上げておきたいと思います。

市長：厳しいような言葉があるかもしれませんが、何か現場が良くなってほしいという思いは皆一緒だと思いますし、先生方は、本当に一生懸命やられているということは、共有はされていると思います。本当に、どこからやるか

ということをちゃんと考える時に、学力テストの話等も本当はもっとしたいですし、とても1回では終わらない話です。多分先生方も思っているはずなのですけれども、学力テストの見えないプレッシャーはやっぱりあるでしょうし、それは保護者の何かそういうものを要求している節があるかもしれないです。保護者もおそらく何か変わっていかないといけないとも思いますし、その点を決して議論を上滑りにならず、話を続けていかななくてはいけないと思います。決して理想だけを掲げる教育行政ではなくて、現場の課題を解決しながら、あるべき方向に、一緒に進んでいくような形にしていきたいと思っていますので、最後に、遠藤先生、今日の諸々をまとめていただいて、「教育委員わかってない、きれいごとばかり言うんじゃない。」など、そういうことも含めてぜひおっしゃっていただければ。

遠藤校長：まさか、こういうふうには振られるとは思っていなかったの。先ほどずっといろいろな議論をしている中で、私が感じたのは、ここ最近入ってくる新採の教員の挨拶がうまいのです。あと、教育実習で来る大学生の挨拶がうまいのです。

市長：それは子どもたちの前での挨拶。

遠藤校長会会長：いや、職員の前での。

市長：自己紹介とか。

遠藤校長：自己紹介とか、いろいろなものの挨拶が非常にうまくて、私なんかは、常に何か挨拶のときには、原稿を起こして、メモをつくって、大体それを見れば話せるようにしているのですが、新採の先生方、非常にお話が上手なのです。なぜだろうと思い、何人かと話したのですが、やっぱり総合的な学習の時間が、ずっと蓄積して今になって現れてきているのだと。私たちの小さい頃は、多くの人前でプレゼンしたり、自分で考えたことを自分はこう思うと言ったりということほとんどなかったですね。ですが、総合的な学習の積み重ねを行って来て、やはり原稿を見なくても、「どうですか？」と

挨拶を振られて、きちんと挨拶ができるので、素晴らしいなと思います。やはり、それはこれまでのずっと蓄積なのかなと思って見ていました。

二つ目、本校で昨年定年退職したベテランの先生がおります。体育の時間にマット運動で iPad を使っていました。体育の先生も iPad を使ってすごいなと。体育のこの場面で、画像を撮って、これを子どもたちに、あなたの演技はこれですよと見せて、どこを注意したらいいのかなというように iPad を使っていました。御本人は「私も iPad 使ってみたかったのよ」と言うのですが、実際使っている様子を見て、すごいなと思いました。やはり正直若い教員もいるのですが、我々も頑張っていかなければならないなという話をしました。

3点目として、若い教員は大学で iPad、スマートフォンを使ってのプレゼンをやってきていますから、非常にこの授業で使うのがうまいです。子どもたちに iPad を配って、撮って、先生のところにみんな一斉に送ってとやると、みんな撮ったものが集まって、映してポンポンと、実に授業に無駄がなくスムーズに流れていて、そういう活用もあるのだと思って関心をして見ていたところでした。以上です。

市長：ありがとうございました。すみません、時間を10分オーバーしてしまいましたけれども、ぜひ、これからちょっと場合によっては、皆様にもう少し個別に聞き取りや御相談することもあるかと思えます。とにかく同じ方向、目的に向かって、我々も頑張っていきたいと思っていますので、これからもよろしくお願いします。本日、本当にお忙しいところ、どうもありがとうございました。

事務局：どうもありがとうございました。本日は長時間に渡り、御協議いただきまして、本当にありがとうございました。次回の第8回会議は、1月の下旬を予定しております。今回は、市長のお話にもあったとおり、オランダでのイエナプラン教育の報告を予定しております。これをもちまして、平成30年度第7回つくば市総合教育会議を終了させていただきたいと思えます。本

様式第1号

日はありがとうございました。  
以上。